



平成27年5月20日

### 「がんプロフェSSIONナル養成基盤推進プラン」の中間評価結果について

このたび、「がんプロフェSSIONナル養成基盤推進プラン」について、中間評価を実施しましたので、その結果をお知らせします。

#### 1. 事業の概要

がんは、我が国の死因第一位の疾患であり、国民の生命及び健康にとって重大な問題となっています。そのため、本事業では、手術療法、放射線療法、化学療法その他のがん医療に携わるがん専門医療人を養成する大学の取組を支援しています。

<事業計画期間> 24年度選定事業（15件） 24～28年度（5年間を予定）

#### 2. 中間評価について

中間評価は、各選定事業（15件）の進捗状況を検証し、適切な助言を行うことで、今後の事業の実効性を高めること、及び本事業の趣旨や成果を社会に情報提供することを目的としています。がんプロフェSSIONナル養成推進委員会において、進捗状況や成果等を確認し、本事業の目標が達成可能か否かについて評価を行い、評価結果を別添のとおり取りまとめました。

<本件担当> 高等教育局医学教育課  
担当：がん医療人材育成専門官 島居 剛志  
医学教育係長 竹本 浩伸  
電話：03-5253-4111（内線 3306） 03-6734-3306（直通）

## がんプロフェッショナル養成推進委員会 委員名簿

天野 慎介	一般社団法人グループ・ネクサス・ジャパン理事長
○今井 浩三	東京大学医科学研究所特任教授
小松 浩子	慶應義塾大学看護医療学部教授
鈴木 洋史	東京大学医学部附属病院教授・薬剤部長
玉木 長良	北海道大学大学院医学研究科教授
田村 和夫	福岡大学病院長
恒藤 暁	京都大学大学院医学研究科特定教授
中川 恵一	東京大学大学院医学系研究科准教授
西山 正彦	群馬大学大学院医学系研究科教授
樋野 興夫	順天堂大学医学部教授
本田 麻由美	読売新聞東京本社編集局社会保障部次長
三谷 絹子	獨協医科大学医学部教授
道永 麻里	公益社団法人日本医師会常任理事

(○：委員長)

(五十音順 敬称略 計13名)  
平成26年12月3日現在

## 「がんプロフェッショナル養成推進委員会」所見

平成27年5月20日

### 1. 事業の成果

近年、がんは我が国の死因第一位の疾患であり、国民の生命及び健康にとって重大な問題となっている中、「がん対策基本法」が平成19年4月から施行されたが、この中で、手術、放射線療法、化学療法その他のがん医療に携わる専門的な知識・技能を有する医師その他の医療従事者の育成が求められている。

このため、本事業は、複数の大学がそれぞれの個性や特色、得意分野を生かしながら相互に連携・補完して教育を活性化し、がん専門医療人養成のための拠点を構築することを目的に、平成24年度から取組を開始している。

本年、本事業は3年目を迎え、事業の進捗状況や成果を検証し、評価結果を各大学にフィードバックすることにより今後の事業の推進に役立てる目的で、このたび、中間評価を行った結果、各大学において新たな取組の開始や従来の取組の改善など、様々な工夫や努力が確認された。

具体的には、平成26年10月末時点で、①新たにがんの特化した臓器横断的な講座（緩和医療に特化した講座や放射線療法に特化した講座等）を42講座設置、②大学院に設置した教育コースに1,700名を超える履修者の受入れ、③地域のがん医療に従事するがん専門医療人の養成コースの設置や全国がんプロ e-learning クラウドの充実等によるがん医療の均てん化に向けた取組の強化・発展など、大きな成果が上がっており、本委員会としても高く評価する。

また、これらの他にも、各大学がそれぞれに自大学の強みや地域の実情等を考慮し、特色ある取組を行っている。

なお、各取組により、事業計画や連携大学数、地域の実情等がそれぞれ異なることから、今回の中間評価は各取組の内容を比較して優劣をつけるものではなく、各取組が掲げた当初計画の進捗状況や本事業の目標が達成できるか否かを評価したものであることに御留意いただきたい。

## 2. 現状の課題

一方で、取組によっては例えば下記の①～③のような課題もある。

- ① 履修者数が目標に達していない。
- ② 大学間の連携が不十分で、各大学の強みを生かすという連携のメリットが十分に発揮されていない。
- ③ 取組が連携大学間に限定されており、地域の医療機関との連携や、患者や市民に対する情報発信など、成果を地域社会に還元する取組が不十分。

## 3. 今後の期待

現在、我が国は高齢化により医療ニーズが大きく変化する中で、地域における医療・介護の総合的な確保が大きな課題となっており、2025年に向けて、地域での効率的かつ質の高い医療の確保と地域包括ケアシステムの構築に取り組んでいる。そういった中で、がんについては、高齢化の進展等により患者数の増加が予測されているが、一方で、早期発見と治療法（手術療法、放射線療法、薬物療法）の進歩により生存率が向上しており、今後は、治療法の更なる充実に加え、個々の患者のライフサイクルに応じた対策などの新たな取組が求められる。

今後、各選定大学には、今回の中間評価結果における本委員会のコメントや、以下に記載の事項等を踏まえ、取組を一層推進されることを期待する。

1. がん専門医療人養成コースの履修者や修了者に対し満足度調査を行う等を通じてプログラムの改善に努め、当初の受入れ目標を達成すること。
2. 連携大学が共同でシンポジウムや研修を開催したり、教員や学生が相互に交流を深めたりする等により、各大学の特色ある取組の成果を連携大学間で共有し、他大学に普及できるよう取り組むこと。
3. 地域の医師会や患者団体と意見交換を行う等により、がん専門医療人の養成に対する地域のニーズを取組に反映させるとともに、地域全体におけるがん医療の質の向上に貢献するため、地方公共団体やがん診療連携拠点病院等と連携して、がん医療に従事する者の知識及び技能の向上等に取り組むこと。

また、以下の点についても取組を期待したい。

4. 事業の責任体制を明確にした上で、限られた部局・講座等を取組を任せるのではなく、全学的な実施体制で取り組むこと。
5. 補助期間終了後も事業を継続することを前提に、事業継続のための具体的な方針を検討すること。
6. 各大学が本事業における各拠点の取組の結果を参考にできるよう、各取組の目的、実施内容、結果について、ホームページ等の活用による一層の情報発信に取り組むこと。その際、外部の者が当該ホームページを検索しやすいよう工夫すること。

最後に、本事業に選定された各大学においては、補助期間終了までに当初の目標の達成に向けて、今回の中間評価結果等を踏まえた取組を進めていただくことを期待しているが、前述のとおり、現状ではまだ多くの課題が残されていることから、国には、引き続き必要な財政支援を継続していただくよう要請するものである。

## 取組概要及び中間評価結果

## ＜総合評価結果＞

評価	総合評価基準	件数
S	順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を十分に達成し、当初目標を上回る効果・成果が期待できると判断される。	1件
A	順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	6件
B	おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。	3件
C	進捗が遅れており、このままでは目的を達成することは難しいと思われるので、留意事項を考慮し、当初計画の変更が必要と判断される。	3件
D	改善を要する事項があり、このままでは目的を達成することは難しいと思われるので、留意事項を考慮し、当初計画の大幅な変更が必要と判断される。	2件
E	特に重大な課題があり、今後の努力を持っても当初目的の達成は困難と思われるので、補助事業を中止することが必要と判断される。	0件

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	1
大 学 名	札幌医科大学、北海道大学、旭川医科大学、北海道医療大学 (計4大学)
取 組 名	北海道がん医療を担う医療人養成プログラム
事業推進責任者	札幌医科大学 医学研究科長 堀尾 嘉幸
取組概要	
<p>広大な医療圏を形成する北海道においてがん専門医療人を養成することは重要な課題であり、「がんプロフェッショナル養成プラン」は大きな成果を上げてきた。しかし、がん専門医療人の多くは都市部の基幹病院に集中しており、遠隔地域のがん患者の多くは専門的ながん医療を受けることが困難な状況にある。</p> <p>本プログラムは、北海道内の4つの医療系大学が道内地域医療機関と連携して、単位互換による講義、全国レベルのe-ラーニングクラウドの活用、インターネット等の情報通信技術(以下ICT)によるカンファレンス、チーム医療研修などを行って、遠隔医療機関で研修する医師やがん診療医療人に地域医療に従事しながら高度の専門教育を受けられるようにし、地域のがん専門医療人の養成とがん医療レベルの向上を図り、さらに、臨床を出発点とした最先端のがん研究の基盤作りを推進するものである。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにながんに特化した臓器横断的な講座を3つ設置していることは評価できる。</p> <p>○ICT等の活用により研修会を広く開催していることが評価できる。</p> <p>○大学からの出前事業でもある地域合同がんセンターボード・特別セミナーの試みは興味深い。開催回数を増やし、大学院生の教育を含めた展開に期待したい。</p> <p>○教育コースとは別に、札幌医科大学、北海道大学及び旭川医科大学で腫瘍センターセミナー(公開合同カンファレンス)を開催し、延べ3,478名の医療関係者が参加していることは評価できる。</p> <p>○看護師、薬剤師対象の試みは順調であり、地域がん医療薬剤師コースは多数の薬剤師を受け入れており、地域格差の是正に貢献している。</p> <p>●専門的医師の養成に関しては、目標達成に一層の努力を要する。また、目的に掲げた地域格差の是正について成果が読み取りにくいので、改善が必要である。</p> <p>●チーム医療、がん登録に関する具体的な試みが読み取れず、本プラン開始後に何がどう発展したのか、成果に対する評価材料に乏しいため、さらなる取組が必要である。</p> <p>●地域への情報発信が年1回の市民公開講座のみでは不十分であり、さらなる工夫が必要である。また、北海道全体を視野に入れた情報発信についても検討・工夫が必要である。加えて、e-learningの推進について、収録数が12コンテンツと少なく、単位化の進行も遅い点は改善が必要である。</p> <p>●PDCAサイクルによる評価の確立にむけた具体的な行程について検討する必要がある。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	2
大 学 名	東北大学、山形大学、福島県立医科大学、新潟大学 (計4大学)
取 組 名	東北がんプロフェッショナル養成推進プラン
事業推進責任者	東北大学 加齢医学研究所 教授 石岡 千加史
取組概要	
<p>本プランは、高齢化社会での地域におけるがん医療の課題解決のため、地域がん医療に貢献するがん専門医療人養成に重点を置く。がん医療に必要な学識と技能や国際的レベルの臨床研究を推進する能力を育み、大学、地域、多職域(医療チーム)、患者会が連携して在宅医療や緩和ケアを含めた地域のがん医療とがん研究を推進するための広域かつ包括的教育プログラムを提供する。</p> <p>連携4大学が教育コアとして大学院に新たに3講座と42教育コースを設置し、地域のがん診療連携拠点病院(以下、がん拠点病院)等との連携により、多職域のがん専門医療人を養成し地域の人材交流を推進する。高齢化と地域医療過疎を特徴とする日本の地域がん医療モデルを構築する新規性と、東日本大震災の経験をもとに震災時の新しい地域がん医療モデルを構築する独創性がある。</p> <p>新しい地域がん医療モデルが構築されれば、我が国のみならず世界の地域がん医療の向上へむけ波及効果が期待できる。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにごんに特化した臓器横断的な講座を3つ設置していることは評価できる。</p> <p>○がん横断的な講座やメディカルスタッフ養成に関する複数のコースの設置に積極的に取り組んでいる点は評価できる。</p> <p>○チーム医療の推進が積極的に行われている点は評価できる。</p> <p>○各拠点の単位互換、がん拠点病院の専門医・指導医による講義など、当初の計画に沿って手堅く実現していることは評価できる。</p> <p>●過疎化対策の連携を目標としているにも関わらず、受入れ人数が目標に対し少ない点は改善が必要である。</p> <p>●医療チーム数の割に、カンサーボードが活発に実施されていない点は改善が必要である。</p> <p>●山形大学の重粒子・陽子線治療コースについて、装置の納入時期を踏まえ、履修者の教育効果が高まるよう、計画的に取り組むことが望ましい。</p> <p>●震災に対する各大学の連携が不透明である点は改善が必要である。</p>	



## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	3
大 学 名	筑波大学、千葉大学、群馬大学、埼玉医科大学、日本医科大学、獨協医科大学、茨城県立医療大学、群馬県立県民健康科学大学 (計8大学)
取 組 名	国際協力型 がん臨床指導者 養成拠点
事業推進責任者	筑波大学 医学医療系 消化器外科 教授 大河内信弘
取組概要	
<p>千葉大学、群馬大学に臨床腫瘍学講座設置し、多職種教員によるがんに対する包括的な専門家教育、臨床試験体制を整備した。両大学ともにこの講座は承継的に維持していく。既存の対面講義で構成される大学院プログラムは、多様な生活背景を持つ候補者は学習機会に参加できず、現実的には入学できなかった。</p> <p>本拠点はがんプロ全国e-learningクラウドを単位履修に直結する形で提供することで、276名の大学院生の受入れに成功している。先進的放射線治療センターを擁する群馬大学、筑波大学を中心に放射線腫瘍医(20名)、医学物理士(38名)を多く養成していることも特徴的である。</p> <p>大学院教育の国際化にも挑戦しており、e-learningクラウドを通して米国がん学会の講義の提供や、留学生への授業提供を意識し、e-learning講義の英語化、中国語化を試みた。東日本がんプロ8拠点合同の市民公開シンポジウム、OCWなどの活動、コンテンツのアウトリーチにインターネットのIT環境を積極性に活用している。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにがんに特化した臓器横断的な講座を2つ設置していることは評価できる。</p> <p>○オールジャパンのe-learning教育組織の構築を着実に進めており、自グループだけでなく、全国規模に発展させていることは非常に評価できる。</p> <p>○e-learningクラウドを利用して、276名の大学院生の受入れや、国際的な大学院教育につなげて成果を上げている点は優れている。</p> <p>○群馬大学に設置された多職種連携教育研究研修センターにおいて、アジアや欧米からの研修生を積極的に受け入れ、国際的に活躍できる指導者の養成に取り組んでいる点は評価できる。</p> <p>○日本医科大学に抗がん剤による皮膚障害に対応する新たなチームを設置したことは評価できる。</p> <p>○分野横断臨床試験の提案を多数行っている点は評価できる。</p> <p>●がんプロe-learningクラウドが更に活用されるよう、働きかけを実施すべきである。</p> <p>●e-learningシステムにおいては、本プログラムが終了した後の継続的運用について検討が必要である。</p> <p>●地域医療との連携について、情報提供や情報交流に終わっており、周辺の地域医療機関との連携が十分見えないため、さらなる努力が必要である。</p> <p>●他職種連携の成果を具体的に示す方策を考える必要がある。</p> <p>●一部の大学で進められている国際連携の取組を、全体の成果につなげることが望ましい。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	4
大 学 名	東京大学、横浜市立大学、東邦大学、自治医科大学 (計4大学)
取 組 名	がん治療のブレイクスルーを担う医療人育成
事業推進責任者	東京大学 医学系研究科長 宮園 浩平
取組概要	
<p>本事業は、大学院教育におけるがん医療の指導的医療人を育成する取組である。がん医療の均てん化の推進にもかかわらず、難治がんが多数存在することや、多面的な症状に対する治療方法が不十分であることなど、がん医療には未解決の課題が山積している。このような課題に対しては、がんに苦しむ人々の心に寄り添った医療を原点として、がんの本質的な研究が遂行できる環境を拡大整備し、臨床問題解決型の研究を行うことが必要である。そのために、本事業は、研究者養成に重点を置く東京大学に、教育改革や地域医療を推進する3大学が連携することによって、最先端研究とがんの実地医療の両方に造詣を有し、広い視点からがん医療を先導する能力を有する医療人を育成することを目標とする。</p> <p>このような医療人が継続的に輩出されることによって、がん治療のブレイクスルーとなる成果が得られるとともに、多面的ながんの苦痛が軽減されることが期待される。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにがんに特化した臓器横断的な講座を2つ設置していることは評価できる。</p> <p>○各大学の役割が明確で、合同セミナーを定期的に関催するなど、それぞれの良い点を波及させようという工夫と努力は評価できる。</p> <p>○4大学合同セミナーでの大学と患者団体との連携強化や、地域医療に関するアンケート調査はユニークであり、これらの成果に期待したい。</p> <p>○国際連携活動や論文作成に力点が入っている一方で、多職種連携の教育についても意欲的に取り組んでいる点は評価できる。また、栄養サポートチームの活躍に期待したい。</p> <p>○研究者の養成について、大学院生の研究成果のレベルを4段階で評価する取組はわかりやすい。</p> <p>●今後は、患者視点のがん診療を更に推進する必要がある。</p> <p>●コースにより大学院生の受入れ状況に差があるため、各コースの充実を期待したい。なお、地域医療を担うコースでは、医師に対してだけのチーム医療の実践ではなく、看護師など他職種との実践教育も必要ではないか。</p> <p>●それぞれの大学が独立してプログラムを実施しているように見えるため、大学間の連携に一層取り組む必要がある。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	5
大 学 名	東京医科歯科大学、秋田大学、東京医科大学、東京工業大学、東京薬科大学、弘前大学 (計6大学)
取 組 名	次世代がん治療推進専門家養成プラン
事業推進責任者	東京医科歯科大学 医歯学総合研究科 副研究科長 江石 義信
取組概要	
<p>がん専門外科医師を含めがん専門医療人については中期的には確保のめどが立ったと考えられる。しかしながら、養成された人材が医療現場において効果的・効率的にがん医療に貢献するためには、技術応用の管理が必要と考えられ、がん診療についての質向上及び質保証の包括的枠組みの提供が望まれている。このため、各種低侵襲がん治療方法の習得、総合臨床腫瘍医の養成、がん診療の地域医療における普及・推進、がん臨床研究の推進とその成果の実践応用、がん治療に必要な機器の開発に従事できる人材の養成、がん化学療法の質向上に貢献できるがん専門薬剤師の養成、これに加えて事務要員の養成を図ることとした。</p> <p>本プランは従来の養成プランの成果を基に発展的に策定したものであり、また、従来の養成プランは大学で継続させ、併せて習得できるように設計されている。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) C	
進捗が遅れており、このままでは目的を達成することは難しいと思われるので、留意事項を考慮し、当初計画の変更が必要と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにながんに特化した臓器横断的な講座を2つ設置していることは評価できる。</p> <p>○基幹的な大学において臨床腫瘍学分野が新設され、化学療法及び緩和医療の推進に関する教育と臨床に寄与している点は評価できる。</p> <p>○講座の教授人件費を大学負担とするなど、講座の維持発展に大きな努力を払っている点は評価できる。</p> <p>○がん登録士の養成や地域医療への積極的な取組を行っていることは評価できる。</p> <p>○市民並びに患者団体への普及啓発並びに連携を積極的に推進している点は評価できる。</p> <p>●幾つかの特定の領域における意欲的な大学間連携の取組は示されているが、それを大学間全体における連携促進につなげる必要がある。</p> <p>●学生の合同演習・会議等がなされておらず、学生の大学間の交流がどこまでされているか見えない点は改善が必要である。</p> <p>●秋田県・青森県における地域医療ネットワーク構築については、具体策(医療の均てん化を推進する方法等)が必要ではないか。</p> <p>●東京薬科大学の学生を東京医科大学への臨床研修に参加させている点について、より学習の成果が高まるよう取組の検証や改善に取り組むこと。</p> <p>●外部評価を実施し、改善・充実に努めること。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	6
大 学 名	慶應義塾大学、北里大学、首都大学東京、信州大学、聖マリアンナ医科大学、 聖路加国際大学、東海大学、東京歯科大学、山梨大学、国際医療福祉大学 (計10大学)
取 組 名	高度がん医療開発を先導する専門家の養成
事業推進責任者	慶應義塾大学 医学部附属先端医科学研究所(細胞情報研究部門) 教授 河上 裕
取組概要	
<p>本プランでは、前期がんプロに続き更に高度ながん医療を担う人材養成を目標に「先端医療の推進・トランスレーショナル研究(TR)」と「QOLの向上」を担う人材養成を2大柱として、各研究科に新規大学院コースとインテンシブコースの設置、また信州大に腫瘍医学講座を設置し、更に10大学15研究科からなるメリットを生かしデメリットを減らすために、5全体委員会(教育、研究、評価、広報、分野別)を設置し、全体を統括した。特に分野別委員会では連携事業として2大プロジェクトであるTRとQOLに加えて、各大学の現場の専門医療人で構成される11委員会(化学療法、放射線治療、緩和・在宅、低侵襲、小児、支持療法、チーム医療、遺伝子医療、看護、薬学、地域医療)を設置し、各分野に得意な研究科が中心となる連携活動を実施し教育研究医療の均てん化を図った。外部評価と改善に直結するFDを毎年開催し、恒常的なプラン改善を図った。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) C	
進捗が遅れており、このままでは目的を達成することは難しいと思われるので、留意事項を考慮し、当初計画の変更が必要と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たになんに特化した臓器横断的な講座を1つ設置していることは評価できる。 ○様々な職種を対象とする多くのコースが設定されている点や国際学会への発表を積極的に行っている点は評価できる。 ○海外から講師を招請し、リーダーシップ研修や模擬患者を利用した多職種少人数によるチーム医療研修を実施するなど、工夫されている点は評価できる。 ○支持療法テキストの作成など、実践的な教育が行われている点は評価できる。</p> <p>●多大学の連携により多数のコースが設定され総花的である。努力はしているものの、各大学が連携して学生を育成していくには困難な印象を受けるため、取組について改善が必要である。 ●連携大学間での取組について、より一層の情報発信が求められる。 ●QOLの向上を事業のテーマの一つとして掲げているのに対し、緩和ケアのプログラムが少なく、学生の受入れ実績も少ないことから、改善に向けて更なる検討が必要である。 ●一部の大学で学生の受入れ人数が目標に比べ大幅に下回っていることから、全体としても、履修者の確保に向けた取組を強化することが必要である。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	7
大 学 名	順天堂大学、島根大学、鳥取大学、岩手医科大学、東京理科大学、明治薬科大学、立教大学 (計7大学)
取 組 名	ICTと人で繋ぐがん医療維新プラン
事業推進責任者	順天堂大学 医学研究科長 新井 一
取組概要	
<p>順天堂大学はがん専門医療者の養成を行い、がん医療の底上げに貢献してきた。今後は、全国のがん患者に均等に医療者養成の成果を還元し得る臨床の連携、基礎と臨床が協働する医薬看理工連携が課題である。従来、地方と首都圏大学との人材交流は少なく、地方のがん医療人養成はマンパワーに問題があった。本プランでは、本学及び連携医科系大学と非医科系大学をICTと循環型人材交流で結び、地域から世界まで、更に基礎から臨床まで俯瞰(ふかん)するがん研究者・医療人の養成を目的とする。</p> <p>具体的には(1)順天堂大学に先導的がん医療開発研究センターを整備し、これを拠点とし、(2)東京理科大学・明治薬科大学・立教大学との共同橋渡し研究の体制整備と実施、(3)島根大学、鳥取大学、岩手医科大学の構築するコンソーシアムと理薬工学系大学をICTと人材交流でつなぎ、臨床・研究・教育に一気に風穴をあける平成のがん医療維新を引き起こしたいと考えている。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たになんに特化した臓器横断的な講座を6つ設置していることは評価できる。</p> <p>○ICTやWebを活用する形で、大学間や地域間の連携に関する取組が実施されつつある点は評価できる。</p> <p>○首都圏と地方部の大学・医療機関の連携を促進し、地域医療の向上を図る取組は、今後、他の地域でも応用できるモデルとなりうる。</p> <p>●ICTを活用し連携を深める取組や循環型交流に向けた取組のスピードが遅いため、迅速に実施する必要がある。</p> <p>●がん治療認定医の資格取得者が少ないため、取組を改善する必要がある。</p> <p>●海外からの講師の招請や臨床研究研修会などで得られた知見を、プロジェクトに参加する医療従事者だけでなく、社会に還元するよう努めることが望ましい。</p>	



## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	8
大 学 名	東京女子医科大学、杏林大学、帝京大学、駒澤大学 (計4大学)
取 組 名	都市型がん医療連携を担う人材の実践的教育
事業推進責任者	東京女子医科大学 化学療法・緩和ケア科教授 林 和彦
<b>取組概要</b>	
<p>本事業は、都市部における地域がん医療のコーディネータとなる医療者を養成する取組である。東京都では、がん患者の生活環境や要望は大きく異なる上に急速に高齢化が進行し、急性期から在宅医療までの地域がん医療連携の効率化が急務であるが、地域医療のコーディネート能力のある医師や看護師は極めて不足している。</p> <p>3大学病院はがん診療連携拠点病院として質の高いがん医療を提供してきたが、加えて東京女子医科大学には次世代医療テクノロジーに関する最先端の研究能力、帝京大学には我が国の緩和医療やチーム医療を黎明期からけん引してきた実績、杏林大学には質の高い臨床研究を積極的に推進する能力がある。更に駒澤大学にはがんの遠隔診断や画像転送システムの開発能力がある。本事業では4大学の総力を結集し、患者・家族の視点に立ちながら、質・量ともに多様化する都市型がん地域医療を担うことのできる次世代のがん医療人リーダーを養成する。</p>	
<b>中間評価結果</b>	
(総合評価) D	
改善事項があり、このままでは目的を達成することは難しいと思われるので、留意事項を考慮し、当初計画の大幅な変更が必要と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにながんに特化した臓器横断的な講座を2つ設置していることは評価できる。</p> <p>○公開シンポジウムの開催が多い点や、がん経験者による講演会、検診促進活動などを実施している点は評価できる。</p> <p>○難治症例や緩和ケアなどの3大学合同カンファレンスの取組は、チーム医療の推進や地域全体としての医療の質向上につながると期待される。</p> <p>●東京女子医科大学に設置予定であった講座がまだ設置されていない点は、改善が必要である。</p> <p>●受入れ実績が目標に到達できないと思われるコースがあり、早急な改善が求められる。また、目標数が低めに設定されていることを考慮すれば、取組についてより一層の奮起が必要である。</p> <p>●取組名に掲げる「都市型がん医療」の内容が不明確であるため、目標に対する対応策が定まっていない。「都市型」としての取組について、工夫が求められる。</p> <p>●緩和医療を除く領域での活動が乏しく、チーム医療としての具体的な展開が不安視されるため、取組の改善が必要である。</p> <p>●地域行政機関等との意見交換なども取り入れてはどうか。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	9
大 学 名	金沢大学、富山大学、福井大学、金沢医科大学、石川県立看護大学 (計5大学)
取 組 名	北陸高度がんプロチーム養成基盤形成プラン
事業推進責任者	金沢大学 大学院医薬保健学総合研究科長 金子 周一
取組概要	
<p>本事業は、北陸地区における医科系4大学・看護系1大学で構成し、スキームは①がん教育改革(本科8コース)、②地域がん医療(インテンシブ11コース)、③がん研究者養成(本科2コース)より構成する。①がん教育改革については、IPEによるチームマインド養成カリキュラム、多職種連携によるチーム医療のリーダー養成カリキュラム、医科系大学連携による単位互換制度を特徴とする。②地域がん医療については、能登北部地区等の医療過疎地域を拠点とした地域がん医療研修、インテンシブコースによる地域がん医療の指導者養成、がん専門医の地域定着を狙いとするコースを設けている。地域がん医療に貢献できる看護師養成コースを設け、地域看護の活性化、休職中看護職復帰へつなげる。③がん研究者養成については、国際機関連携教育、卒前卒後一貫教育、MD-PhDによる学部・大学院一貫教育による高度な研究能力を有するがん研究者養成を図る。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) D	
改善事項があり、このままでは目的を達成することは難しいと思われるので、留意事項を考慮し、当初計画の大幅な変更が必要と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たになんに特化した臓器横断的な講座を3つ設置していることは評価できる。  ○受入れ目標人数が40名と少ないものの、実際には目標を大きく超えて受け入れている点は評価できる。  ○地域の21施設の医療機関を結んだテレビ会議システムによるがんプロキャンサーボード症例検討会はユニークな取組であり、その成果に期待したい。</p> <p>●これまでの外部評価の実施が確認できないため、速やかに外部評価を実施し、取組の改善・充実に努めること。  ●キャンサーボードの実施や各種団体との連携事業が少ないため、取組の更なる改善・充実が必要である。  ●「チーム医療のリーダーの養成を目指す」とあるが、どのような役割や能力を有する専門職者が育成されているか示されていないことから、養成すべき人材像を明らかにする必要がある。  ●がん治療専門医の受入れ人数が目標の半分にも達していないため、取組の更なる改善・充実が必要である。  ●グループ固有の達成目標に対する評価指標について、「国際がん治療分野の講座を設置」と記載してあるが、実際の取組について記載がなされていない。取組の改善につなげるため、設定した目標についての成果・効果を確認に把握することが必要である。  ●北陸における地域特性を生かしたがん医療の推進や医療人の養成の目玉が見えにくいため、改善が必要である。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	10
大 学 名	名古屋大学、浜松医科大学、岐阜大学、名城大学、藤田保健衛生大学、 名古屋市立大学、愛知医科大学 (計7大学)
取 組 名	組織横断的がん診療を担う専門医療人の養成
事業推進責任者	名古屋大学 大学院医学系研究科長 高橋 雅英
<b>取組概要</b>	
<p>平成19年度より5年間にわたり実施された「東海がんプロフェッショナル養成プラン」では、東海地域に基盤をもつ大学と医療施設の連携により、臓器横断的ながん診療を担うがん医療の専門家が数多く養成されるとともに、横断的・集学的ながん診療の体制と人材育成の拠点が整備されてきた。</p> <p>本事業「組織横断的がん診療を担う専門医療人の養成」では、名古屋大学を主幹とする東海地域の大学がそれぞれの特色を生かして相互に教育を活性化しながら、臓器横断的ながん診療・がん研究を担う人材の養成を進展させるとともに、前事業の積み残し課題である放射線治療と緩和ケアの専門医療人の養成にも力を入れる。</p> <p>本事業によって養成されるがん専門医療人が、各臓器を専門とする診療科や他職種との組織横断的なチーム医療の中でその専門性を十分に発揮することにより、高度ながん医療とがん研究を実践できる新しい診療体制と教育の拠点を東海地域に創生、整備する。</p>	
<b>中間評価結果</b>	
(総合評価) C	
進捗が遅れており、このままでは目的を達成することは難しいと思われるので、留意事項を考慮し、当初計画の変更が必要と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにがんに特化した臓器横断的な講座を3つ設置していることは評価できる。また、浜松医科大学において4つ目のがん専門講座(放射線腫瘍学講座)を新設したことは特に評価できる。</p> <p>○広く地域の医療者に対して特任教員が自ら講義・質疑応答を行うことで、地域とその医療機関との緊密な交流を図るという「東海オンコロジーセミナー」は有効な取組であり、3年間で延べ475回もの公開カンファレンスを実施したことは評価できる。</p> <p>○国際共同を含む治験及び多施設共同研究の件数が右肩上がり増加している点は評価できる。</p> <p>●一部のコースでは受入れ実績が0人となるなど大学院生の入学者数が少なく、目標に対しての充足率が低いため、履修者の受入れと資格取得者の養成に向けて、一層の努力が必要である。</p> <p>●コース履修者・修了者の満足度調査からも明らかなように、化学療法・放射線療法などに関する大学院生への教育プログラムの見直し、横断的講義の更なる導入など、より魅力的なプログラムへの改善が必要である。</p> <p>●緩和医療に関する取り組みへの工夫も必要である。</p> <p>●臨床研究・論文発表などの業績やチーム医療等の普及、地域への貢献などの成果については努力の跡は見られるが、本事業はがんの専門的人材の養成を目的としており、比較的低位設定されている目標を超える履修者の受入れと資格取得者の養成について、更なる努力が必要である。</p>	



## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	11
大学名	京都大学、三重大学、滋賀医科大学、大阪医科大学、京都薬科大学 (計5大学)
取組名	次代を担うがん研究者・医療人養成プラン
事業推進責任者	京都大学 がんセンター長・教授 千葉 勉
取組概要	
<p>本事業は、平成24年度がんプロフェッショナル養成基盤推進プランで選定された京都大学、三重大学、滋賀医科大学、大阪医科大学、京都薬科大学における「次代を担うがん研究者・医療人養成プラン」に関する取組であり、先端のがん研究者の養成と地域がん医療に貢献するがん専門医療人の養成に重点を置き、次代のがん研究、がん診療のイノベーションを担う人材、新規診断法や治療法、ケア法を開発できる人材を養成、及び、地域のがん診療拠点と連携して、腫瘍内科医、腫瘍外科医、放射線治療医、乳腺専門医、婦人科腫瘍専門医、緩和医療医、がん専門薬剤師、がん専門看護師を養成する。</p> <p>先端研究施設、がんセンター等での分野横断的研究、集学的研究、腫瘍薬学研究等の基盤を整備、同時に集学的医療、全人的医療プログラムの充実、国際的視野をもつがん研究者・がん医療人教育の推進、5大学間の人材交流を図り、人材養成とがん医療の発展を目指すものである。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) S	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を十分に達成し、当初目標を上回る効果・成果が期待できると判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにながんに特化した臓器横断的な講座を3つ設置していることは評価できる。</p> <p>○国際学会等の発表が目標数値に達している点は、特に評価できる。</p> <p>○受入れ学生数と資格取得者数が共に多く、全体として活発に取組が進められており、当初目標を上回る効果・成果が期待できるため、特に評価できる。</p> <p>●一部の連携大学において履修者を受け入れているコースがあるほか、市民向けのセミナーの開催や各種団体との連携が進んでいない場合があるため、全ての大学において、積極的な取組が行われるよう努めていただきたい。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	12
大 学 名	大阪大学、京都市立医科大学、奈良県立医科大学、兵庫県立大学 和歌山県立医科大学、大阪薬科大学、神戸薬科大学 (計7大学)
取 組 名	地域・職種間連携を担うがん専門医療者養成
事業推進責任者	大阪大学 大学院医学系研究科 特任教授 松浦 成昭
取組概要	
<p>本事業は連携7大学が、がんの予防・検診から、診断、治療、在宅、緩和医療に至るまで、がんのそれぞれの局面に必要な人材養成を行うことにより、がんの治療成績向上及び患者QOLの改善を実現し、関西地区におけるがん死亡率最悪の状況からの脱却を図るとともに大学間の連携を強化することにより、養成する人材の職種を増やすことで、関西各地区の医療均てん化も推進する。</p> <p>薬物・放射線・緩和医療専門医、がん看護、医学物理、細胞検査、薬学各分野の医療スタッフに加えて、疫学研究者養成による予防等のがん対策の推進、病理医養成による診断能力の向上を図るとともに、外科治療も強化し、3つの治療法が連携して機能するようにする。</p> <p>また、大阪薬大、神戸薬大の新たな参加により大阪大学と一体化した薬剤師教育・研究の拠点を関西に形成する。さらには、職種間連携によるチーム医療を推進し、産学連携、医工連携による研究推進も行う。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにながんに特化した臓器横断的な講座を2つ設置していることは評価できる。</p> <p>○最先端の高精度放射線治療を含む集約的治療への対応の取組は評価できる。</p> <p>○専門的看護師の教育プログラム、普及プロジェクトに努力が認められる点は評価できる。</p> <p>○大学病院等の専門医の協力による実習体制の強化や、がん診療連携拠点病院との連携などを教育体制に明確に位置づけ、臨床能力の向上に役立っている点は評価できる。</p> <p>○他大学他職種合同合宿研修、患者団体らとの本音交流会、近畿地区各府県の行政担当者との意見交換、西日本の他のがんプロチームとの合同シンポジウムなど、工夫した取組を行っている点は評価できる。</p> <p>●各職種で履修者の受入れに取り組んでいるが、一部受入れ実績のないコースがあるなど、受入れ人数が目標に達していないため、取組の改善が必要である。</p> <p>●一部の取組を実施していない大学があることから、大学間連携を一層強化することが必要である。</p> <p>●海外でのがん診療のポイントなど良い点をより多くの人々が学べるようにするため、海外からの招請講演だけでなく、実習型演習などをしてはどうか。費用対効果も高いと考えられる。</p> <p>●専門的医師の養成については、更なる努力が必要である。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	13
大 学 名	近畿大学、大阪市立大学、大阪府立大学、関西医科大学、神戸市看護大学、神戸大学、兵庫医科大学 (計7大学)
取 組 名	7大学連携先端がん教育基盤創造プラン
事業推進責任者	近畿大学 医学部長 伊木 雅之
取組概要	
<p>本プランは、阪神地区の国公私立7大学8学部の医学、看護学、薬学系大学院研究科が相互に連携し、高度ながん診療と研究を実践できる人材養成の基盤整備を推進する。基盤整備のため教育改革、地域医療、研究者養成の3部門を設置する。教育改革部門では、がん診療に携わる若手医師及び医療人の発掘と育成を目指した専門教育プログラムを開発する。地域医療部門では、地域の医療機関で活躍するがん医療専門人の養成や人的交流を行う。また、がん医療情報の共有を図り、多職種が連携した広域医療ネットワーク構築を目指す。研究者養成部門では、ゲノム薬理学的個別化治療や高精度放射線治療法の開発など基礎研究と臨床研究を融合した教育プログラムのもと、国際競争力を有する研究者を養成する。</p> <p>これらを実現するため、臨床腫瘍学、放射線腫瘍学、緩和医療学の講座を新設する。また、包括的がんセンターを具体化することで、がん教育拠点としての機能を強化する。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにながんに特化した臓器横断的な講座を4つ設置していることは評価できる。</p> <p>○本事業の目的の一つである緩和、薬物、放射線腫瘍学の講座を開設している点は評価できる。なお、緩和医療講座が2つ開設されたことは、取組に対する意欲が感じられ、特に評価できる。</p> <p>○緩和ケアインテンシブコースについて、単位化できている点は評価できる。</p> <p>○共通特論講義や模擬患者を用いた職種横断的臨床課題演習、緩和ケア講習会等を全大学協同で実施していることは評価できる。</p> <p>○活動内容をHPに加え、FacebookやCAPELで情報発信して、地域の医療関係者に最新の情報を提供しようとする試みは評価できる。</p> <p>●地域密着型のコースの内容が不明確である。</p> <p>●受入れ人数が目標人数を下回っていることから、より一層、履修者の確保に努めるとともに、質の高い専門医療人を養成することが期待される。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	14
大学名	岡山大学、愛媛大学、香川大学、川崎医科大学、高知大学、高知県立大学、徳島大学、徳島文理大学、広島大学、山口大学 (計10大学)
取組名	中国・四国高度がんプロ養成基盤プログラム
事業推進責任者	岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科長 谷本 光音
取組概要	
<p>本プログラムは中国・四国地方の全域にわたる大学院、がんセンター、がん診療連携拠点病院が参加する多職種の高度がん専門医療人養成の教育プログラムである。各大学等の持つ特色、地域性を生かし互いに補完し止揚する教育拠点を確立する。高度なレベルで標準化された共通コアカリキュラム及びeラーニングによる域内統一カリキュラムによる教育(共育)と大学間連携による優れた指導者による大学、分野、職種をこえた専門職連携教育(協育)、英語教育と海外先進施設との連携により国際的に活躍する人材の養成と、地域医療機関・患者会との連携による在宅高齢者がん医療に貢献する専門医療人の養成を特徴とする。</p> <p>高度専門知識に加え、チーム医療・リサーチマインドを身につけた全人的高度がん専門医療人が多数輩出されることにより、中国・四国地域におけるがん治療の均てん化、標準化が実現され、各大学、地域における臨床研究や橋渡し研究が活性化される。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) A	
順調に進捗しており、現行の努力を継続することによって当初目的を達成することが可能と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにながんに特化した臓器横断的な講座を3つ設置していることは評価できる。</p> <p>○がん薬物療法専門医等の受験のために、症例報告書作成フォームであるE-ポートフォリオを導入している点は評価できる。</p> <p>○緩和医療教育体制の充実のため、全国がんプロ協議会緩和医療部会を組織したり、全国の緩和ケア関連講座で使用可能な共有の教材を作成したりする活動は、特に評価される。</p> <p>○中高生や市民、一般医療人に対する啓発活動に積極的に取り組んでいる点は評価できる。</p> <p>●専門職としての知識の集大成となるエビデンスの創出については、効果が分かりにくいいため、改善が必要である。</p>	

## 「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」の取組概要及び中間評価結果

整理番号	15
大 学 名	九州大学、久留米大学、産業医科大学、福岡大学、福岡県立大学、佐賀大学、熊本大学、長崎大学、大分大学、宮崎大学、鹿児島大学、琉球大学 (計12大学)
取 組 名	九州がんプロ養成基盤推進プラン
事業推進責任者	九州大学 大学院医学研究院 教授 片野 光男
取組概要	
<p>平成24年度は主に体制整備を行い、多くのコースが開始された平成25年度から、研修等の活動を開始した。これまでに、「がん専門医療人やがん医療研究者を養成する指導者の不足」を解決するための活動として、九州がんプロ全体研修会を開催、「がん医療に関する海外医療機関等との連携体制の未整備」を解決するための活動として、アサン医療センター訪問研修を実施、「九州内におけるがん専門医療人の偏在」を解決するための活動として、へき地・離島実習を実施、「eラーニングシステムや多職種連携教育における体制の継続」の課題解決のため、eラーニング訪問ファシリテーションを実施した。</p> <p>本事業の質を高めるため、がんプロ学生全員を対象としたアンケートの実施、内部評価・外部評価を実施した。西日本のがんプロ拠点が合同で開催した市民公開シンポジウムの企画・運営を担当し、がんプロフェッショナル養成基盤推進プランの取組を広げる活動にも尽力した。</p>	
中間評価結果	
(総合評価) B	
おおむね順調に進捗しているが、当初目的を達成するためには、留意事項を考慮し、一層の努力が必要と判断される。	
(コメント)	
<p>○新たにながんに特化した臓器横断的な講座を3つ設置していることは評価できる。</p> <p>○「国際的視野を持った人材」を育成するため、教員及び学生が、東アジアにおけるがん臨床試験の分野で目覚ましい実績をあげている「韓国アサン医療センター」の訪問研修については、特色があり成果も期待できるため、評価できる。</p> <p>○鹿児島県の全地域拠点病院・県指定病院を集めての4部門合同研修会の実施は地域におけるがん診療の均てん化、向上に資する取組として注目されるものであり、評価できる。</p> <p>○地域医療機関へ大学院生を派遣するなど、地域のニーズに合わせた試みがなされている点は評価できる。</p> <p>○多職種の教員及び学生が一堂に会して研修を行う九州がんプロ全体研修会やeラーニング訪問ファシリテーションの実施など教育プログラムにおいて、新たな試みを実践し、努力している点は評価できる。</p> <p>●各種セミナーのアンケート結果について、がん医療のリーダー、指導者的役割を担える人材としての成長を実感できているのは5割程度であるという回答結果を踏まえ、当初の目標達成に向けて、さらなる工夫、努力が必要である。</p> <p>●受入れ人数は目標を上回っているものの、連携大学数を勘案すると、大学院入学生・資格取得者数は決して多くはなく、大学間・コース間で格差が認められるため、この点については、さらなる努力に期待したい。</p>	